

書評、松石勝彦著『新版 現代経済学入門』 青木書店2002年刊

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2002年9月30日 受理)

著者の松石氏は一橋大学名誉教授で現在は大妻女子大学教授である。長年マルクス経済学を研究され一橋大学で多数の研究者を養成されて来られた方だ。従って資本主義経済の矛盾を解決しうる唯一の可能性としては社会主義社会しかないという信念を持たれていたものと推察される。しながら1989年のベルリンの壁崩壊に始まった東欧社会主義国の連鎖的崩壊からついには1991年のソ連邦の崩壊に至った状況を体験された後では如何なる観点で現代資本主義社会を分析されているのかを標題の新著から分析したい。1917年のロシア10月革命から生成発展した現実の社会主義社会が完璧に崩壊していった現実際に「見るべきものは見つ」との感慨を得てマルクス経済学に幻滅していった人々に現代資本主義の将来の姿を展望出来る様な見方を提供出来ているのかどうかを見てみたい。

松石氏の著書の構成は基本的にはマルクスの『資本論』第一巻を基礎としている。まずアダム・スミス、デーヴィッド・リカードの理論を基礎にマルクスが発展させた労働価値説を敷衍する事で資本主義経済の基礎をなす商品の分析を行っておられる。つまり商品を生産する労働は商品の2要因たる使用価値と価値に対応して具体的有用労働と抽象的人間労働の2側面を有すると説明されている。この様な理解から導きだされるのは抽象的人間労働は超歴史的な存在ではなく商品生産に固有な存在であると言う事になる。宇野弘蔵教授の様に抽象的人間労働を歴史を超越した経済原則的存在と捉える見方もあるが松石氏はマルクスの規定を変更しない。

松石氏の見方はロシア10月革命直後の共産主義者の経済観に通ずるものがある。資本主義社会を変革し社会主義経済を建設しようとした際に商品形態を拒否する事で新しいスタートを切った。社会的必要労働時間の配分は使用価値量によって規定されるべき具体的有用労働によった次第である。その事はロシアの国民経済を大混乱に陥れる事になり結局は再び商品経済を導入する為の「新経済政策 (NEP)」の導入を迫られることになるのである。その後の社会主義経済は労働者に対する強圧策と懐柔策を交互に試行しながらも効率の運営には成功せず、部分的に商品経済原理を導入しようとする様な試みも為されたが中途半端な商品経済原理の導入に成功する訳も無く結局は自己崩壊してしまったのである。

もし抽象的人間労働なる概念が商品生産に固有な存在であるとする商品経済を排除した完成した社会主義経済に於いて何を基礎に社会的分業が可能となるのであろうか。使用価値の無限に近い種別の相違を基礎とする質的に異なる具体的有用労働を社会的分業に組織するには質

的に同等な抽象的人間労働をという概念を用いる事なしには不可能ではないだろうか。コンピューターがいくら発展しても質的に異なるものを量的に統一するのは不可能であろう。人類は社会主義社会の建設という壮大な歴史の実験を行なって見事に失敗したのである。そこから何らかの教訓を得る必要は無いのであろうか。マルクスの教義も変更を要する場合がある事を容認すべきかと思うが、この点について松石氏はマルクスに忠実すぎるのではないかとの疑念を呈さざるを得ない。

第2の論点は貨幣論である。松石氏はマルクスと同様に貨幣は金であると規定されている。1971年の米ドルの金兌換停止以降30年以上が経過した。金兌換なしでも外国為替の固定相場制は維持しようとスミソニアン協定が結ばれたが結局は失敗し変動相場制が始まりその結果世界経済の不安定な状況が続いている。欧州諸国は1999年より共通通貨ユーロを導入し2002年には現金の流通も始まった。通貨主権を放棄してまでこの様な制度を創設したのは金による価値保証を喪失した米ドルに各国国民経済をゆだねる事の危険性を回避する為である。将来において米国の覇権が失われるのは不可避であろうがその際には米ドルも世界通貨としての地位を喪失する事になる。欧州経済の自衛のために創設されたユーロが米ドルに替るしかないであろう。しかしながら新通貨ユーロ自体も金による価値保証を有する訳ではない。その様な状況のもと貨幣は金であると言う事を論証するのは非常に困難である。

松石氏はマルクスの論理を忠実に踏襲される。商品の価値は一般的等価物で表示される事になり、その一般的等価物が貨幣となりその貨幣には金になると説明される。そして貨幣が金でなくなった現在では貨幣はもはや価値尺度機能を喪失したのかどうかを自問され、無価値の紙幣が依然として価値尺度機能を果たしている事を容認される。しかしそれは貨幣が現在でも結局は金によって価値が裏付けられているからだとされる。その論拠として第一に外貨準備に占める金準備が2000年末で米、独、仏、伊でそれぞれ56.9%、35.0%、47%、45.8%とかなりの比率を占めており日本の1.9%というのは非常に少なく例外的である事。「対外支払準備のための金の保有は、大量の金をただでねかせておくだけであり、大きなムダである。にもかかわらず、世界の公的保有が、このように大きいということは、いぜん世界貨幣は金であることの動かぬ証拠である。(96ページ)」とされ、「第二に1971年のドルと金の交換停止は、単に1934年以來つづいた金1オンス=35ドルという交換レートでの交換の停止にすぎず、いぜん金とドルとは自由市場を通して交換されている。……かくて、円やドルは金とつながっている。……だから諸商品の価値は何円、何ドルで表示され、貨幣は価値尺度機能をはたしている。(97ページ)」とされるのである。

松石氏は、貨幣は金であり現在の貨幣も究極のところは金であると主張されている次第であるが上記の論証は成功しているのだろうか。米国の金準備比率が56.9%と高いとされるがそれは外貨準備の中での金準備比率であり軍事的政治的覇権を背景に垂れ流し続けている米ドルの流通残高から見れば大きいものではない。ちなみに、2000年末の米国の金・外貨準備1,262.80億ドルの内56.9%の718.0億ドル分が8,137トンの金である(95ページ)が、米国財務省

発行の“Treasury Bulletin” 2001年3月号によれば2000年12月末の米ドル流通残高は5,938.74億ドルであり金によってカバーされる比率は12.1%となりずっと小さい。また米ドルが自由市場で金と交換されるという言い方は若干奇妙ではないだろうか。米ドルでもってあらゆる商品を購入できるというのが現状であり、金も石油もその他の商品も米ドルと交換されるのではなく米ドルで購入されるのではないのだろうか。それが一般的等価物としての貨幣の機能であるからだ。

1971年以降の状況において貨幣は金であるとの論証が出来れば論理的展開は極めて明快になるのであろうが、プレトン・ウッズ体制での金との連関性を失ってしまった現在の通貨を規定するのは非常に困難である。マルクスの論拠を基礎にしつつもその論拠を超越しなければこの論証は不可能なのではないか。松石氏がこの論証を果たされる事を望む。

松石氏はこの後インフレーションについて考察されている。「インフレーションとは、……流通必要貨幣量を超えて不換紙幣を投入し、価格総額をふくらませることである。(110ページ)」と定義されている。この様な観点からクルーグマン等の貨幣数量説的なインフレターゲット論を批判されている。しかし、現在の問題は極端な過剰流動性あるいはベース・マネーの極端な増加にも関わらず何ゆえに「デフレーション」が続き物価や資産価格が下降を続けているのかと言う問題なのではないのだろうか。115ページから116ページにかけてデフレーションの説明をされているが、当初のインフレーションの定義からは現状の物価下落と不況の継続は説明できないのではないか。この点についても明解な分析を御願いたいと思う。

以上松石氏の論点に対し自分なりの疑問を投げかけた次第ではあるが、この著作全体に対して否定的に評価している訳ではない。この著作は経済学を初めて学ぼうとする学生を対象としているのであり、総てを出来る限り明解に叙述する必要がある。ソ連邦崩壊後の資本主義社会に生きている我々に、資本主義は永続する社会なのか、あるいは資本主義の後に異なった社会が来るのか、を明確に示そうとされた松石氏の努力は大いに評価出来る。特にコンピューターと情報ネットワークが現在の資本主義経済にどのような影響を及ぼしているのか分析されて居られる点は非常に新鮮な議論である。ただ、この様な資本主義の大きな変化を経済理論にどう反映させるかと言う方法論は必ずしも明確ではないのだが。

また資本主義社会の現状をインターネットを駆使して最新の資料を用いて分析されている事には敬服した。以前であれば最新の統計数字を使用するにはその数字の公刊まで待たねばならずどうしてもタイミングがずれたのであるが本書にはその様な事がない。一橋大学助教授の石倉雅夫氏が恩師の松石氏に協力されたとはしがきに記されているがこの様な師弟関係は非常に麗しく心温まる思いがした。

Katsuhiko Matsuishi, *Introduction to Political Economy*, 2002

Hajimu WATANABE

College of Liberal Arts and Science for International Studies

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2002)

Prof. Dr. Katsuhiko Matsuishi ist Professor emeritus der Hitotsubashi Universität und hat sich längere Zeit damit beschäftigt, die ökonomische Lehre von Karl Marx zu erforschen und mit ihr den heutigen Kapitalismus zu analysieren. Wahrscheinlich ist er der Meinung, daß die einzig mögliche Alternative, die Widersprüche der kapitalistischen Wirtschaft zu lösen, im Sozialismus liegt.

Aber, mit dem Fall der Berliner Mauer ist der sozialistische deutsche Staat, die Deutsche Demokratische Republik, von innen zusammengebrochen. Danach kam die allgemeine Katastrophe in allen sozialistischen Staaten Europas. Am Ende wurde die Sowjetunion 1991 aufgelöst. Seitdem sind mehr als zehn Jahre vergangen. Wie interpretiert Prof. Dr. Matsuishi unter solchen Umständen und unter Anwendung der ökonomischen Theorien von Karl Marx die heutige Welt? Ist seine Interpretation erfolgreich? Das begründet mein Interesse an diesem Buch.

Es gibt in diesem Buch etliche Punkte zu diskutieren. Ich habe lediglich zwei Punkte für meine Kommentare gewählt.

Erstens, der Begriff der abstrakt menschlichen Arbeit. Karl Marx schreibt in seinem "Das Kapital", daß die Ware zwei Faktoren, d.h. den Gebrauchswert und den Wert hat. Die Ware ist das Produkt der Arbeit. Die Arbeit, die in der Ware dargestellt ist, hat einen Doppelcharakter, da die Ware zwei Faktoren hat. Die Arbeit, die den Wert bildet, ist die abstrakt menschliche Arbeit. Die Arbeit, die den Gebrauchswert bildet, ist die konkrete nützliche Arbeit. Die loyalen Schüler von Karl Marx haben seine Lehre wie folgt verstanden: wenn das Produkt der Arbeit keine Ware ist, gibt es darin keinen Wert und daher keine abstrakt menschliche Arbeit.

Prof. Dr. Kozo Uno hat diese Interpretation der Lehre von Karl Marx kritisiert. Seiner Meinung nach hat in jeder Gesellschaft die Arbeit stets den Doppelcharakter der abstrakt menschlichen Arbeit und der konkreten menschlichen Arbeit. Deshalb hat es keine Beziehung, ob das Produkt der Arbeit die Form der Ware nimmt.

Gerade nach der Oktoberrevolution in Rußland hat man versucht, den sozialwirtschaftlichen Produktionsplan nach der Quantität des Gebrauchswertes zu gestalten. Aber es ging nicht gut. Die

russische Wirtschaft endete im Chaos. Man mußte die „Neue Ökonomische Politik“ einführen, damit die Form der Ware teilweise die soziale Produktion reibungsloser organisieren konnte. Seit diesem Zeitpunkt hat man den sozialwirtschaftlichen Plan in den sozialistischen Staaten unterschiedlich durchgeführt, zeitweise mit Zwang oder Gewalt, zeitweise durch materiellen oder geistigen Anreiz. Trotzdem sind sämtliche Versuche erfolglos geblieben. Auch teilweise deshalb hat man die Marktwirtschaft eingeführt. Alle Versuche endeten mit den ärmsten Ergebnissen, und das sozialistische System schlug fehl.

Warum? War die Idee des Sozialismus falsch? Oder war die Methode des Verwirklichungsversuches falsch? Ich vermute das Letztere. Der Mißerfolg der sozialistischen Wirtschaft lag vielleicht am Fehlen des Begriffes „abstrakt menschliche Arbeit“. Hierzu wünschte ich von Herrn Prof. Dr. Matsuishi eine neue, deutliche Erklärung zu erfahren. Aber, er ist in diesem Buch Karl Marx zu treu geblieben. Dies enttäuscht mich offen gesagt etwas.

Zweitens möchte ich von Prof. Dr. Matsuishi über die Interpretation vom Geld in der heutigen Zeit erfahren. 1971 hat Amerika den Austausch seiner Währung mit Gold gestoppt. Da der U.S.Dollar ab jenem Moment Papiergeld geworden ist, ist der japanische Yen auch Papiergeld geworden. Der Autor behauptet, daß das Geld trotzdem Gold ist. Aber die Argumentation dessen ist sehr schwierig und scheint fast unmöglich zu sein. Seit 1971 sind mehr als dreißig Jahre vergangen. Obwohl es immer große Turbulenz gegeben hat, ist die Weltwirtschaft irgendwie ohne Umtausch mit dem Gold vorwärtsgekommen. Wie kann man dann diese neue Situation mit der Theorie vom Goldgeld erklären?

In der gegenwärtigen japanischen Wirtschaft hat die japanische Regierung eine zu große Anzahl von Staatsanleihen herausgegeben. Die Zentralbank hat eine große Menge Banknoten in Umlauf gebracht. Der Autor warnt vor der Inflation, da die jetzt umlaufenden Geldstücke die nötige Masse Geldstücke als Zirkulationsmittel überschreiten könnten. Aber, die Realität ist anders. Die Gefahr der japanischen Wirtschaft ist momentan nicht die Inflation sondern die Deflation. Ich glaube auch, daß die Inflation in Japan in der Zukunft unvermeidlich sein wird. Trotzdem müßte die gegenwärtige Situation klarer erörtert werden, was in diesem Buch unzureichend getan wird.

Ich habe in meinen Kommentaren dieses Buch besonders kritisch beurteilt, was zugegebenermaßen etwas einseitig scheint, denn ich habe natürlich gleichzeitig neues dazugelernt. Außerdem möchte ich daraufhinweisen, daß Herr a.o.Prof. Ishikura, ein Schüler von Prof.Dr. Matsuishi, die neuesten statistischen Zahlen durch Internet für dieses Buch erstellt hat. Dies finde ich von besonderer Bedeutung. So sollte ein Buch in der heutigen Zeit geschrieben sein.